エッセイ

# サハラ時代の追懐(その２)

―遊牧菌が住み着いて 35 回の転居―

佐々木晃彦

私事で恐縮ですが、中学卒業まで山形県川西町でボンヤリと過ごしました。奥羽山脈、吾妻山地、飯豊山地に囲まれた川西町を、1878 年に蝦夷地(北海道)へ旅行の途中に立ち寄り一泊したイギリス人旅行作家のイザベラ・バードは、「アジアのアルカディア(桃源郷)」と絶賛しています。山間に田圃と少しの畑が広がる静謐な田舎です。実は私の故郷は町の中心から山奥に７キロ入った僻遠の東沢地区。小学生時代は１年間に担任が４回変わり、最後は村のお姉さんが教壇に立ちました。小中学校含めて複式授業という名の自習が多く、中学生には学校所有の田畑で農作業が課せられました。それは牧歌的な分校(現在は廃校)でした。

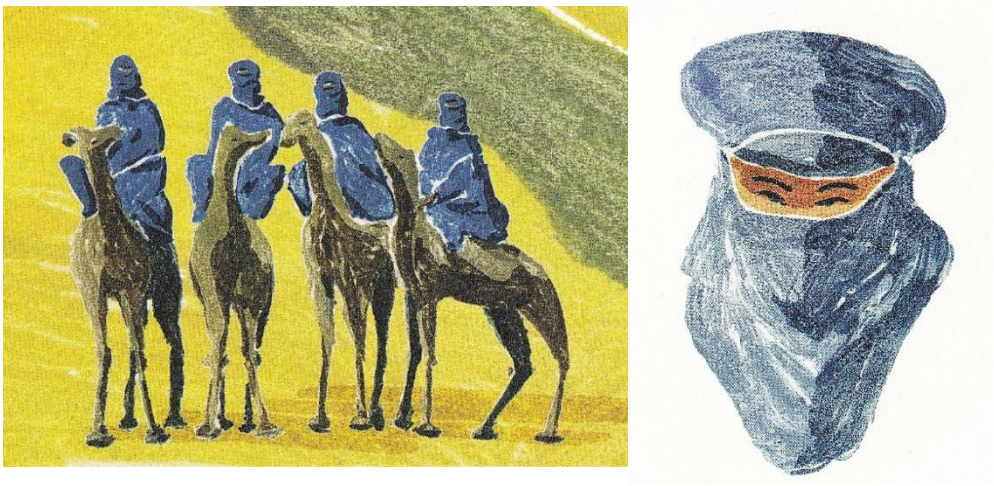
一組の布団と少々の身の回り品を持ち、新設の高校に通学のため東北一の大都会、仙台市木下の今野魚店で下宿生活。転居生活の第一歩です。魚屋さんの次は高校の敷地内に在る寮(長町)、印章彫刻職人宅(薬師堂)、そして農家(岩切)と３年間で４か所、塒(ねぐら)を変えました。その後も移動を繰り返し、最短は千葉県松戸市馬橋の二週間というのがありました(二週間は、ヒドイッ！)。転々とした土地にも思い出があります。世田谷区多摩堤通り沿いの由緒あるお寺、観音寺で二年半過ごし、サハラ砂漠には長期居候していた中野区鷺宮の落語家、二代目桂小南師匠宅から移動しました。ノマド(遊牧民)の真似事がほの見えします。



写真説明：ラクダの群れ(モーリタニア回教共和国・ヌアディブ)

サハラに小中学校などの教育機関は一切ありませんでした。私にとってサハラは、雪が砂に変わっただけです。故郷の豪雪とサハラの砂山は響き合いました。世界のノマドを見渡せば、統率者が支配してきた歴史のあるモンゴル、サバンナで牛の群れを放牧するケニアのマサイ族、ヨーロッパや南北アメリカで暮らすロマなど、地球上を移動する民は実に多い。1970～71 年に南フランスの大学に在学中、ローヌ川の河川敷で 20 人前後の家族を見ました。「彼らは家を持たず移動しているジプシーです」と、友人の母、マルセルが教えてくれました。ジプシーはロマの別名で、私が初めて知った“屋根と四方の壁がない住まい”で暮らす集団です。フラメンコがロマの文化から生まれたことは、後に知ることとなります。

1972 年から 4 年暮らした世界最大の砂漠、サハラはアフリカ大陸の三分の一を占め、アメリカ合衆国とほぼ同面積。サハラの人口は約 500 万人と推定され、殆どがモーリタニア、モロッコ、アルジェリアに住んでいました。サハラ最大の都市はモーリタニアの首都ヌアクショット、第二の都市は私が住んでいたヌアディブです。白人のベルベル系遊牧民で、自身を「自由な人」と呼ぶトゥアレグ族。簡単に組み立て可能なテントを携え、荷物を最小限に僅かな緑と水を求めて移動します。彼らは藍染めのターバンを巻いており、肌が青く染まることから「青い民」と呼ばれていました。「青い民」からは幾度となく、お茶のお誘いを戴きました。お茶を味わいながら、「あらゆる人に平等に接して揺るぎない」民族と思いました。住まいには、火をおこすマキ類の在庫もない徹底ぶりでした。



トゥアレグ族(画：キンチョイ・ラム『移動する民』18, 19 頁, 玉川大学出版部)

西アフリカの歴史と文化を象徴するのがブブ。一枚布で仕立てた、動きやすく、通気性が高い民族衣装です。私も白地の布に胸元を金色の糸で刺繍した、好みのブブを持っていました。それで身なりを整え、見よう見まねで習得した作法で、時々お茶を振舞いました。ポットからポットに何度も注ぎ返し、その後、小さなガラスコップに高い位置から注ぐ。一連のプロセスには熟練を要します。空気を含ませて泡立ちを作り、おもてなしの意を表する儀式性は、他国の紅茶文化にありません。紅茶は彼らとの絆を形成する至福のひと時でした。



写真説明：お茶を注ぎ参加者に尊敬を示す私

遊牧は原始的と思いがちですが、そんなことはありません。遊牧は狩猟採集、農業を経て、不毛の砂漠でも生存できるように考えられた知恵の結晶であり、洗練された生活様式です。唱歌「月の砂漠」は長閑(のどか)な雰囲気が漂わせますが、実態はラクダ、ウシ、ヤギ、ヒツジなどの家畜を注意深く移動させ、飼育し、市場で売る、確立された市場システムに組み込まれておりました。遊牧民は地球温暖化の厳しい環境にも柔軟に調和し、生態系に溶け込み、そのうえ機動性も高い、理に適った資源管理者とも言えます。

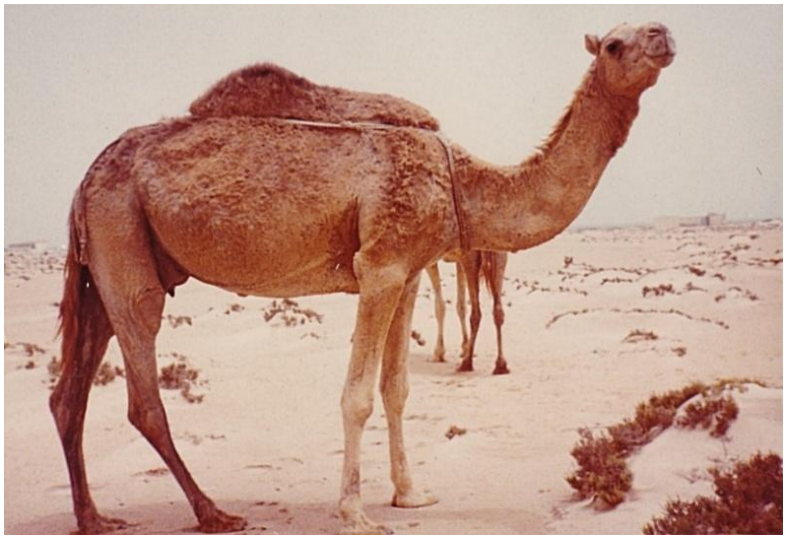




写真説明：賑わいを見せるヤギ市場

サハラでは早朝も真夜中でも、我が家の扉を開ければ傍にラクダがいました。暗闇にラクダのシルエットが浮かぶと、なぜか心が落ち着きました。ラクダは優しくて穏やか、いつも温厚で不機嫌な姿を見たことがありません。人に懐きやすい性格でした。ラクダの所有者から、知能が高く、忍耐強く、慎重で賢明とお聞きしました。群れでは秩序を守り、距離感を

大切にするなど非の打ち所がありません。200 から 300kg の荷物を背負い、一日に 30 から 100km 移動しますから軽トラ並みの能力があります。稀に歯をむき出しに威嚇するのも、攻撃ではなく安全確保のために防御行動をしている自然な反応なのだとか。我が家の前に、お気に入りが一頭いました(下記写真)。購入価格を尋ねたら日本円換算で 5 万円でした。



ラクダを多頭飼いする遊牧民は、相手をおもんばかる心の広い人々でした。周辺に最大の気遣いをし、利他的行動をする彼らには、共に手を携えて生きようとする共感の能力が備わっていました。共感の力が本能なら世界は平和です。私は彼らから、「良く生きる」とは自分一人だけの問題でないことを日常的に学んでいました。良い人間関係をつくり、良い社会をつくる。誰もが掛け替えのない存在で、決して否定されることがない。価値を持つ存在としてお互いを尊重し合う。そのような人間の尊厳が備わっていました。自己肯定感がありました。親しい遊牧民が、Fils du Soleil,Nous sommes Arabes(太陽の子よ、私たちはアラブ人です)と言う時の誇りに溢れた目力は、シッカリと記憶にあります(注：晃彦の晃には「太陽の子」の意味があり、20 代からフランス語圏で、そう呼ばれていました)。誇りを持ち、幸せに生きているなら戦争のない世界になります。

移動を止めれば、多くの困難を乗り越えてきた伝統的生活は破綻します。定住が基本の都市社会を望まないのは当然です。この信念に基づく彼らの活動範囲は、サハラ西部の 200 万平方キロ。秩序と無秩序が釣り合う適度な「ゆらぎ」を生活に取り込み、風通しの良いテント暮らしを満喫してきました。広い土地に大邸宅を構え、サロンにシャンデリア、そして立派なソファー、ゴージャスなベッド・・このような生活スタイルに憧れ、最終目的とする日本人がいるとしたなら、着た切りのブブ一枚を、パジャマ、仕事着、結婚式の礼服にもしている遊牧民とは、天ぷらとスイカ、或いは杏子と牛乳の如く食い合わせが悪いこと、この上ありません。若し二人が一緒に仕事をすれば悲惨なことに・・本稿のテーマから外れるので省かせて下さい。



写真説明：とても思いやりのあるご家族でした

当時、モーリタニアにいた弁護士はオー・ゴーカン・ディアロ、ただ一人です。恰幅が良く、私を見つけると Fils du Soleil(太陽の子)と呼び寄せ、大声で話し、豪快に笑う方でした。彼は可能な限り、私がモーリタニアの人々と接触できるよう便宜を図って下さいました。首都ヌアクショットへの出張時、秘書が運転する弁護士の車で奥地を目指しました。井戸が近づくにつれて遊牧民が増えます。井戸に向かう家畜の群れも多くなります。音量の異なる鳴き声が溶け合い、徐々に大きく聞こえてきます。焚火がそこここに上がります。ノマドの観察が最適な場所は井戸をおいて他にありません。古代と中世と近代が混じり合う不思議な光景が微妙に揺れる所です。行動経済学では不確実性を嫌いますが、全てコントロールしようとすれば息苦しくなります。遊牧民には不安定を受け入れる柔軟性がありました。安定とは変化しないことではなく、変化に同調できる状態です。静かな中に在る「ゆらぎ」は動的安定となります。「ゆらぎ」があり、隙間があり、不安があるから、円転滑脱な想像力も活きてきます。陸揚げされたドイツからの食糧支援物資が二袋ずつ砂漠に置かれ、それを各家庭に運ぼうとしている人たちに出逢いました。試行錯誤の中で揺れながら、彼らは均衡を保ち、新しい可能性の入り口となる「ゆらぎ」のなかで暮らしていました。彼らの安定は「ゆらぎ」と共にありました。不確実な世界では、それが最上の生き方かも知れません。



写真説明：井戸に向かうラクダの群れ



写真説明：支援物資を運ぶ人と子供たち



写真説明：農業従事者と井戸を囲む

私には市場価値の高い専門性や希少スキルがありませんでした。顕著な実績や目に見える成果、「余人をもって代えがたい」ポジションもなく、社の内外で知られるほど活動が可視化されていたとは露ほども思っていません。しかし、拾われ、そしてまた拾われ、異業種間を何度も移動しました。必然的に棲家を転々としました。これは、サハラ砂漠の、移ろう季節、変化する状況で生きている遊牧民を目の当たりに暮らしていたことと無関係ではありません。37 年前の『週刊住宅情報』「都会の遊牧民―年に 1 回の引っ越しで住環境を変える―」に、「結婚生活 15 年。その間にも引っ越しは 13 回。ほぼ 1 年に一度のハイペースだ」の記述（1974 年に私は、モーリタニア回教共和国・ヌアディブで結婚しました）があります。わが国では進学、就職、結婚時に多い引っ越しですが、生涯で経験する回数は平均 3.24 回（第 9 回人口移動調査、2023 年）です。35 回は、矢張り、多いと思います。

段ボール箱から荷物を出す前に、次の転居先に向かったことがあります。関取で元小結青葉山の浅香山親方、金龍こと俳優の金田龍之介さんから、ご近所に引っ越しの勧めがありま

した。浅香山は文京区、金田さんは埼玉県越谷市に住んでいました。金田さんからは「32 回目は越谷を候補に入れて下さい。良い物件があります」のメモ付で、新聞の折り込みチラシがドッサリ届きました。お二人とも亡くなりましたが、心を打ち明け合う金蘭の友でした。

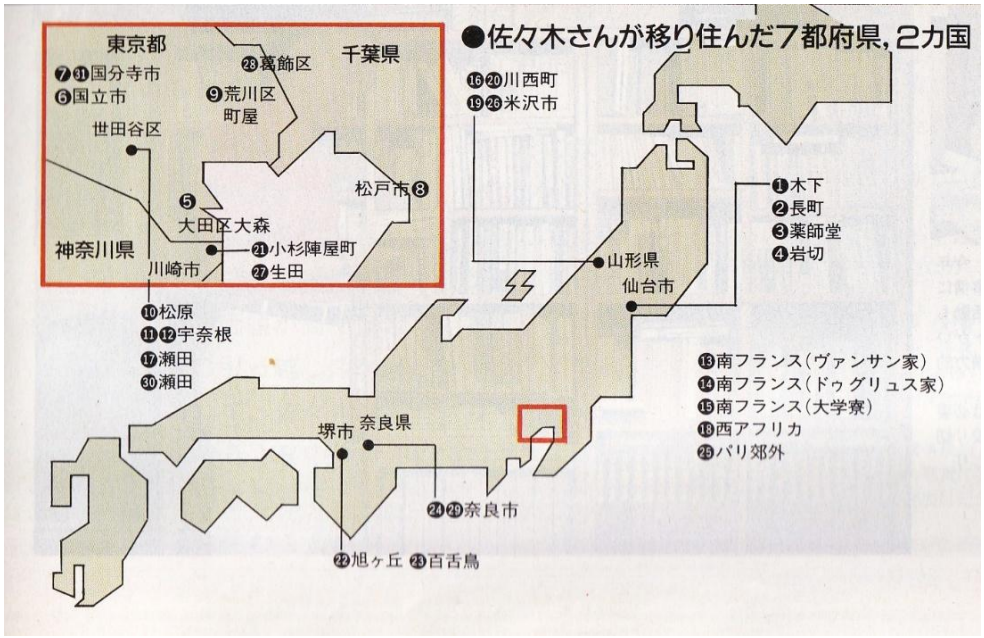
30 回以上も住所が動いていると、知人・友人から見放されます。「転居通知が多くてフォーローできない」「住所録が真っ黒になって、電話もどれが今のか分からない」と苦情も届きます。同窓会関係の通知はパッタリと来なくなります。年３回の転居があったら、住所不明とされても致し方ありません。カメラマンのブルース・オズボーンは「住所と仕事は変えるのに、奥さんは変えないね」と微笑みました。下記の引用文は定住した先々でも、そこを拠点に漂流する様を示しています。

「九州共立大(北九州市)教授の佐々木晃彦さん(55)は、手帳に何日間の空きがあると、ふらっと外国に出かける。大学構内の家で単身赴任生活をしているから身軽▼この春は南太平洋の島国ヴァヌアツに行った。小学校を訪ねて飛び入りで算数を教えたり、もぎたての果物で歓迎して貰ったり・・。そんな感じらしい。行った国は、仕事も含めると約 60 ヶ国▼『目はウチに、心はソトに』がモットー。最近は心も内向きの人が増えた、と感じている。特に若い人は、コンビニと携帯電話で大抵の用を済ませる時代である。『どこか変だと思いませんか。技術のわなではないでしょうか』▼人間は本来、一人では生きていけない。はずなのに、どんどん便利になって、人とじかに交わらなくても、生活に困らない社会になりつつある。海外、それも小さな国によく行くのは『助け合って生きている人たちから教わることが多いから』だという▼専門は文化経済学。『日本人は経済的ぜいたくを求めすぎた。文化に目を戻さないと』。その持論を、東京の交響楽団の評議員など多彩な肩書で実施中。『引き出しが多いほど人生は楽しい』とも。二年前、経済問題をネタに漫才師デビューして話題になったのも、この人だ▼ちなみに学生時代はコーラス部とボクシング部を掛け持ちしている。『要はバランス。人間の右脳と左脳の関係のようにね』。文化と経済もまた然り、と説く」（西日本新聞【春秋】2001 年 6 月 18 日)。※最終頁に 1998 年 10～11 月、Fiji 訪問時の写真。

行き先のホテルを予約せず、予備知識も一切なく、カバン一つで出かけ、入国してから「さて、どうしよう」という移動です。豪華ホテルに宿泊して贅沢な気分を味わい、観光客用の動線で綺麗な海を眺め、極上のリゾート・ライフを満喫する・・これは耐え難い旅です。現地のご家庭に泊まり、皆さんと普段の食事をご一緒し、時には簡単な日本料理を作り、農作業を手伝い、小舟で村長や彼の仲間と釣りをして自給自足・・。

さて、住宅情報誌の取材で来宅した太田宣子は本文で、「水が美味しく物への執着心はないが、心豊かで自由な遊牧民の生活に触れ、どうやら遊牧菌が住み着いてしまったようだ」と書いています。移動文化を教えてくれた遊牧民から受けた影響は否定できません。一処の環境に頼らず、多少の好奇心から新しい風土・雰囲気や刺激を求め、ワクワクしながら引っ越しを楽しんできました。新しい場所で人間関係をリセットすることも厭いませんでした。安

定したマンネリ生活が得意でないことも依拠していたと思います。その結果、転職とも連動させた棲家の移動で、多様な価値観や新しい状況を受け入れることができました。全てサハラの生活で学んだことです。




『週刊住宅情報』リクルート、1989 年 10 月 25 日号、29 頁

引っ越し 35 回の道中では、広く西アフリカをはじめとする自然の潜在能力に敬意を表して参りました。ここ 15 年は定住していますが、移動文化には今も関心を寄せております。ただ最近は朗化現象のご来訪が続き、内科、眼科、歯科、皮膚科・・をプッチ移動中です。そして 36 回目になる転住先ベランダから、富士山の山頂に視線を送っています。(文中の敬称略)



参考文献:塩尻和子編著『変革期 イスラーム社会の宗教と紛争』明石書店、小滝透『サハラの果てに』時事通信社、池上淳『文化と固有価値の経済学』岩波書店、今村薫「ラクダ遊牧民の管理」名古屋学院大学論集、人文・自然科学篇、第 49 巻 第 1 号、31～47 頁。佐々木晃彦「砂と海と太陽と」(財)昭和経済研究所、アラブスタディーズ・月報 2024 年 6 月号。

【Fiji 訪問】1998 年 10 月 29 日、19:00 発 FJ303 便で成田を出発、翌 30 日の 6：45 に Fiji・NADI 国際空港着。午前中は学校訪問。13：00 に NADI 港を、60 キロ北東にある WAYA LAILAI 島を目指して出航。経由地の WAYA LAILAI 島を 16：00 に出航し、最終目的地である NABORO 村に 16：30 到着。翌 31 日の午前中はビーチで貝拾い。16：00 に３つの村の村長と長老がお見えになり、日本の「居酒屋文化」さながらに独特の酩酊感をもたらすカヴァを飲みながら談笑。村に伝わる踊りで温かい歓迎も受けました。滞在中は NABORO 村の村長宅に泊まり、ココナツミルクで煮込んだ料理、釣りあげた魚、カレー、緑の野菜、サツマイモ・・・新鮮で美味しい普段の食事で、村長のご家族や地域の方々と平和な時間を過ごしました。村人と一つ屋根の下で寝食を共にし、ジョン・ラスキン(1819～1900)の言葉、「命と暮らしが充実してこそ、豊かさがあるというものだ」を実感。1998 年 11 月 5 日、10：30 発の FJ302 便で Fiji・NADI 国際空港を出発、同日の 15：20 に成田着。

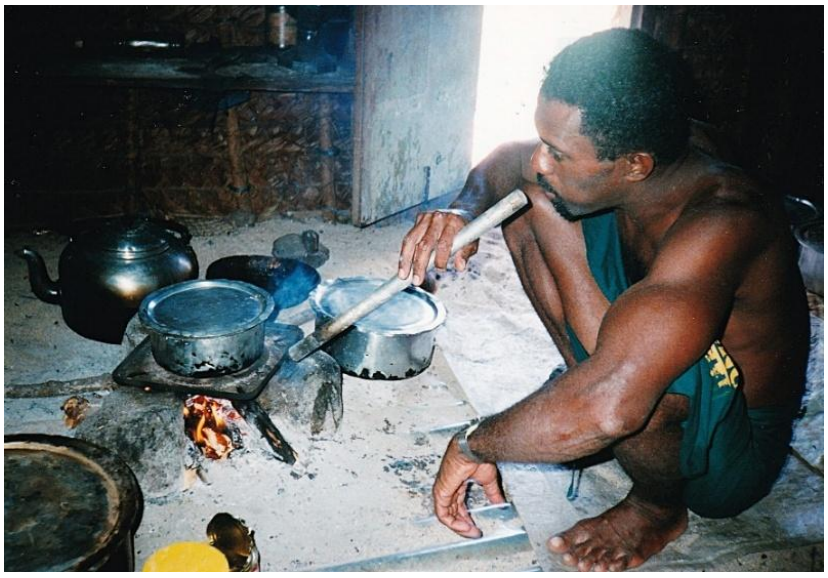








写真説明：10 月 30 日の朝、Fiji の玄関と呼ばれる NADI 国際空港に着きました。NABORO 村に向かう乗船時刻まで 5 時間ほどの自由時間があり、街の中心を散歩する。庶民生活の匂いが漂うなか、目の前に突然、NAMAKA PUBLIC SCHOOL が現れました。事前連絡なしでは不躾と思いながら学校を訪問、私の心配をよそに快く迎えて戴きました。たまたま教室では校長先生が算数の授業中で、途中から私が教えることになりました。生徒たちは驚いたことでしょう。問題を板書し、ノートに転記して解くよう指示。少し難しかったかも知れませんが、真剣に取り組んで貰いました。緊張するなか授業終了のベルが鳴ると、生徒との間に距離感がなくなり、フレンドリーに・・。そんな折りに教壇からカメラを向けた時の表情です。




feel the
difference


feel the
difference















写真説明：NABORO 村では穏やかな人々が、のんびりと暮らしていました。初めてのご縁なのに、ホスピタリティーに満ちた笑顔に囲まれて過ごしました。自分の国やコミュニティに誇りを持ち、皆が幸せに暮らしているのであれば、地球全体が平和になるという証左です(写真上)。宿題に取り組む少年に心配そうに寄り添う母は、子を思う親の気持ちが隠しきれない様子でした。勉強と向き合う少年の必死な姿、「このピリピリと張りつめた緊迫感を逃すまい」と写し撮りました(写真下)。皆さんの屈託のない真摯な生き方に感銘を受けての帰国で、ルネ・デカルト(1596～1650)の言葉、「世間という膨大な書物から学ぼう」に思いが至る機会となりました。